質疑応答①

諸富：主観的幸福など既存の概念とどう違うのか。

ラウパッハ:実践的に開発するのがひとつの目的だ。SDGとも部分的にかぶっている。

山東：領域を定義してシュタットベルケに絞るのか。

ラウパッハ：そうだ。社会インフラに絞る。

山東：環境・社会・経済などある。それのパブリックセクター版か。

ラウパッハ：ポーターはあくまで競争力をゲットして儲かるという話なので。

諸富：基礎理論をやるというのはすごい。

ラウパッハ:それを日本でやる必要を感じる。公的価値をどう位置づけるかが課題だ。

山東：三セクの上に行く理論というが、大きな違いは？

ラウパッハ：顧客満足が新公的経営の骨子だったが、私のものはそれだけではない。共益性の高い事業ばかりなので、個別の住民だけではなく、社会そのものに貢献する。公営プールで健康に貢献するなどだ。もちろん中でトレードオフはある。CBAだけではなく、社会的な貢献度を出したい。

山東：各自治体のものを指標で出して比べられるようにするものをイメージしているのか。

ラウパッハ：それも提案できる。あとは、これまでは電力だけ見ているが、本当は水道・下水・ごみをやっているが、個別にやっていて、シュタットベルケの行政改革につながる。

諸富：市役所の中の企業局だけだが、企業として経営しているという意識はない。

ラウパッハ：ナカモトさんと金沢に行ったら、シュタットベルケに一番近かったが、シュタットベルケに関心はない。企業局の改革のハードルは高い。無関心。下の方はやりたい。

諸富：メリットがないのではないか。儲かるといっても公務員は動かない。これにより市民生活よくなるよとか、インフラ老朽化で自然資本減るよ、インフラ管理が厳しくなる時に、企業局全体で集まって効率化する。一元化、AI全部使ってやることで、市役所もパフォーマンスをよくできるし、ひょっとしたら外に出した方が。それは今の幹部級には訴えないかもしれない。2030年、50年に向けての改革になる。若い人は自分がキャリアを積んでいくそのものになる。

山東：インフラ老朽化シナリオはあるか。

諸富：東洋大学の根本さんが出している。３つのチームとはどのようなものか。

ラウパッハ:公的価値の論理を固める研究会には、田中信一郎さん、龍谷大学の白石さんとか、宇沢先生の弟子のクニモトさんを考えている。加えて、ウッパタール研究所の人もくる。9月14日に訪日する。道路と農林がメイン。2つ目は、ビジネスモデルを比較研究するチームだ。ここにぜひ稲垣さんと中山先生に入ってほしい。ウッパタールと密接な連携をする。滞在して、若い研究者を置いておくという提案もした。予算は、来年半年でも置いとこうと思っていた。あとは出張ベース。若手研究者本人のテーマ次第。

諸富：構成メンバーは？

ラウパッハ:まだアイデアない。

諸富：理論的基礎をやるメンバーは考えているが、この話はまだか。

ラウパッハ:稲垣さんと中山先生を中心というものだ。3つ目は、ガバナンスとファイナンスだ。０は金森先生と一橋大学の山下先生に入ってもらう。全てのベースになる。ドイツには既に2012年まで10年間、500数社のデータがある。地方公営企業の会計がある。力仕事になる。

諸富：本来はシンクタンクか。場合によって学生を公募する。ゼミの学生とか。壮大なプロジェクトだ。1チーム７～８人くらい必要になる。人海戦術だ。日本も全市町村にデータがあるのですごい量だ。日本は１７００くらい。地方公営企業はそれだけある。

ラウパッハ:相当汗をかく仕事だ。

諸富：分析の方針を決める研究者の集まりとデータ解析チームと学生バイト料、お金がとれたらデータ解析の専門会社に委託するかしないと、データ量が多い。

ラウパッハ:ガバナンスは知見を集める。そしてサーベイでテストしたい。電気料金は安い。環境価値あれば、高くても買うよ。

諸富：中山先生はどうか。

中山：2番目のバリューチェーン分析は、僕の場合はラウパッハE１００％を目指して多様なビジネスモデルにすればいいが、ケーススタディを集めるものをやりたかった。類型化が提案のエッセンスだ。

稲垣：興味はある。配電網を引いて地域経済付加価値を高めれないか研究したかった。上下水道と共通で相乗効果あるよねということで興味深かった。能力的にできることとできないこともある。ドイツ語だと難しい。自治体職員なので、すぐ職員に聞きに行けるという強みはある。

ラウパッハ:ドイツのことはある程度把握しているが、日本のことはわからない。金沢・松江などでやっている。

諸富：八木先生が飯田市で地域研究しているので、構想はいいなと思うので、Bをヘッドにして、全体として。

ラウパッハ:これをベースに、日本のあるべき姿を。日本の未来に向かって。

諸富：構想は大きくて素晴らしいが、分野Cだとファイナンスが難しい。

ラウパッハ:今のところは坂本君の卒論を使って、秋までに段取りをつくって走っていきたい。

諸富：公益事業学会の先生に、地域公営企業に詳しい人に加わってもらった方がいいのではないか。

質疑応答②

ラウパッハ：水素は考えているか。

中山：手に負えない。話は既にあった。バイオマス由来をアンモニアにして運ぶ。岐阜の山中でやるもの。

ラウパッハ：三井さんはデロイトで水素の地域付加価値分析をやりたいと言っていた。

中山：どの自治体でもできるものではない。

稲垣：東京都の水素の受託委託も手に入れていて、デロイトは水素に力を入れているようだ。

中山：石油備蓄基地より水素備蓄基地の方が少ないのではないか。

諸富：研究のアウトプットが見えにくい。何が明らかになるのか。自治体に対するインパクトは何か。

ラウパッハ：私がやろうとしているものとテーマは非常に合っている。未来に向かってどんなオプションが自治体にあるのか。特にセクターカップリングと。

諸富：費用便益分析のような視点がいるはず。RE100をやるのがメリットがあるよというものを示すため。「RE100を自治体がやることの経済的合理性を示したい」それをどうするのか。

中山：シナリオ分析をして、どちらが付加価値が高いかという見せ方をする。基本は地域全体だ。

諸富：具体的なメリットを定量的に示せるのか。

中山：シナリオ書けばそれほど難しくはないと思う。

諸富：RE100を外からとってきてもいいとすると矛盾が生じるのでは。

中山：長期では化石が高くなるので域外に流出するお金が減る。

諸富：計算できるか。投資がリターン戻ってくる。

中山：ビジネスモデルをキャッシュフローに書くことは問題ないと思う。

適地条件があるので、プランAは中で投資するが、土地代や風況を考えると外に投資する方が安い場合もある。

諸富：ラウパッハ先生と接点が出てくるか。

ラウパッハ：総合社会インフラサービスの地域付加価値を織り込んで、ベースは事業性がある、そこからどれだけ福祉に使えるキャッシュフローを生み出せるか、指数を出すことはできる。そういうことをシナリオとしてドッキングできるのではないか。かなりオーバーラップするのではないか。

諸富：なるべく共通のあれがあるといい。シュタットベルケ研究とオーバーラップするように。地域に注目して付加価値分析で。シュタットベルケ研究と連携して。

中山：ラウパッハ先生の包括的な中の要素研究になるのではないか。

諸富：私の期待は、ラウパッハ先生と相関があるので、前提となるシナリオは、30，50を見据えたRE100を目指すシナリオ分析があって、メリット・デメリットを地域付加価値分析をやって、主体はシュタットベルケができていけば、そこが中心的な組織になるのではないか。そこを分析していく際に、双方が連携してもらえればというものだ。

ラウパッハ：少子高齢化と、環境問題を解決するために、公益性というキーワードがあって、経済性と公的価値を加えて考察すること。そのためにシナリオ描いて付加価値分析して、それ以外に、社会的な、SDG的なところもありますよというものだ。

諸富：今後の進め方は、ラウパッハ先生に進めてもらって、10月頭までにメンバーシップ・組織構造を固めてもらいたい。Bはエネルギー自治だ。Bの資金をお任せして、科研費が当たれば、中山先生も今日提案していだいたものでいいので、それを位置づけてチームとしてやっていただけないか。私の資金も必要に応じて利用していただいて。